

第 1214 回放送分『炎症性腸疾患』2 回目

ゲスト：上小鶴孝二ドクター

二見いすず

今月のドクタートークは「炎症性腸疾患」をテーマにお送りしています。
お話は、鹿児島県医師会 上小鶴孝二（かみこづる こうじ）ドクターです。
上小鶴さん、よろしくお願いいたします。

上小鶴Dr.

よろしくお願いいたします。

二見いすず

先週は、炎症性腸疾患の代表的な疾患には潰瘍性大腸炎とクローン病の2つがあること。
そしてまずは、潰瘍性大腸炎について教えていただきました。
男女ともに20代の発症が多く、
下痢や血便、腹痛、熱発そして体重減少などの症状があったら、
消化器内科を受診するというお話でした。
今日は、この潰瘍性大腸炎の検査や治療について教えていただきます。
まず検査はどのようなことをするのでしょうか。

上小鶴Dr.

少なくとも大腸カメラの検査は行わなければ診断ができないので、必ず検査します。
あとは便の検査や血液検査をして、炎症がどの程度なのかを確認します。

二見いすず

先週、小学生の患者さんもいらっしゃるというお話でしたが、
お子さんの大腸カメラは大変ですね。

上小鶴Dr.

もちろん麻酔はしますので、その点は安心して検査できます。
小児科の先生とも一緒に視るというケースもあります。

二見いすず

そうなんです。治療はどのようなことをするのでしょうか。

上小鶴Dr.

基本はお薬での治療になります。5-ASA 製剤という錠剤が基本になります。
あとは注腸剤というお尻から入れる薬剤や座薬もあります。

二見いすず

こうしたお薬での治療をしたら、完治するのでしょうか？

上小鶴Dr.

これはすごく大切なことなのですが、潰瘍性大腸炎には完治という概念はありません。

まだ完治させる治療法が見つかっていないからです。

そのため症状が落ち着いている状態の寛解と、症状が悪化している状態の再燃という概念があり、寛解の状態を長く維持させることが治療の目標となります。

二見いすず

症状が落ち着いている状態の寛解と、
症状が悪化している状態の再燃ですね。

上小鶴Dr.

はい。適切な治療を継続することで再燃をコントロールして、
寛解を維持することが大切です。

二見いすず

寛解を維持するには、先ほどの 5-ASA 製剤をずっと飲み続けるのでしょうか？

上小鶴Dr.

そうですね。ただそれでも症状が安定しない方は、ステロイドを使うこともあります。

しかし長く使うことはできないので、治療に難渋する方は免疫を調整する薬剤、例えば点滴や注射の薬を長期間使用する事もあります。

これもさまざまな種類があり、患者さんの症状や年齢などによって
専門の医師がどの薬を使うかを見極めていくことが
非常に重要になってきます。

二見いすず

よく分かりました。

今月は炎症性腸疾患についてお送りしています。

お話は鹿児島県医師会 上小鶴孝二ドクターでした。

上小鶴さん、ありがとうございました。

上小鶴Dr.

ありがとうございました。